

せい太郎の

# ごあんしカタデ

ひる0時～1時20分(毎週土曜日)

みどりの周波数

# RKK

熊本放送

熊本市山崎町30 TEL.328-5511(受付案内)



くまもとの  
必要十分  
情報番組。



# RKK

# ニュースキャッチャー

よる6時30分～6時56分(月～金曜日)

ベートーヴェン

# 第九

第9回

平成2年12月23日(日)午後6時30分

熊本県立劇場コンサートホール

主催:熊本県・(財)熊本県立劇場・県民第九の会・熊本県文化協会



熊本県知事  
細川護 照

熊本県立劇場も8周年を迎え、文化活動の拠点として多くの皆様に親しんで頂いておりますが、県民第九の会は、この県立劇場の完成を記念して設立されました。

以来、年を重ねる毎に会は大きくなり、今では年末にはなくてはならない行事として、素晴らしい演奏会を開催して頂いているところでございます。

これも、第1回から御指導頂いている有馬先生をはじめ実行委員の方々の御努力の賜と、深く敬意を表する次第でございます。

県では、様々な面から文化の支援に務めておりますが、地域文化を支えるものは、県民一人ひとりの文化に対するひたむきな情熱に他なりません。

今年も、熊本交響楽団と共に300人のメンバーが心を合わせ、感動的に歌われる「歓喜の歌」が、熊本の空いっぱいに響き渡り、素晴らしい音楽会となりますよう心から祈念いたします。



熊本県立劇場館長  
鈴木健 二

ベートーヴェンの「第九」は、年の瀬を飾るべく全国各地で歌われるようになりました。これは、この時季に第九を聴きたいという人が増えていることの現れでもあり、着実に日本の風土、日本人の精神構造に溶け込んで来ています。

一昨年の夏、県立劇場をお預かりした私は、文化を求め、人材を探しに県下98市町村を訪ね歩きました。そして熊本には全国に誇れる素晴らしい文化が存在すること、熊本以外の土地では絶対に不可能な事実を発見して深い感動を覚えました。そこには、いま日本人が必要としているふるさとの心情があったのです。

「第九」の演奏会は、県立劇場のオープンを記念して始められたもので、今年で9回目を迎えますが、今ではすっかり熊本の文化として定着した感があります。年齢も職業も経験も様々な人たちが、歌い奏でる「第九」は県民の財産として育ち、愛され、受け継がれて行くことでしょう。

今宵、あなたは、歓喜の歌に包まれながら、新しい年への希望の灯を燃している筈です。



熊本県文化協会会長  
三浦洋 一

県民第九の会の「第九」演奏会がいよいよ第九回を迎えました。県文化協会も共催者の一員として欣びにたえません。

第九の会は初め有志の手づくりの組織で発足したと聞いております。今もその自発的な熱意が有馬俊一先生を軸とした会員の皆さんに受け継がれておりますし、地方の文化のしたたかな強味もそこにあると思います。

しかもコーラスは県民から公募されたなかから編成された声です。まさしく県民の声ともいえます。その声には行く手を阻むもの、滞るものを一挙におし流す力があります。湧きあがるような瞬発力です。

日本人は明治から今日まで欧米のさまざまな音楽を受け容れ、愛唱してきました。「第九」も多くの日本人の心性に適った曲に違いありません。歳末の熊本に明るく強靱な「第九」が響きわたる日が楽しみです。



県民第九の会実行委員長  
有馬俊 一

本日はご来聴下さいまして有難うございます。おかげ様で第九演奏会は第九回を迎えました。皆様方のご支援で今まで続けてこられましたことを、心から感謝申し上げます。何事も回を重ねればそれだけ上達するものですが、私達もさすがに九回目と評価される演奏会にしたいと念じております。

今年の指揮は初山和明氏、独唱は山田綾子・木村宏子・大野徹也・福島明也の4氏、ともにわが国一流の方達です。全国では2百回を超える第九演奏会が開かれると言われる現状で、この2、3日前後がそのピークになりますので、指揮者もソリストも引張りだこ、大変にお多忙な中からお繰り合わせお出で頂きました。望外の喜びでございます。

管弦楽は熊本交響楽団、合唱は県民第九の会合唱団です。今年の合唱団員公募には、県下各地より4百名近い応募がありました。ステージの関係でその全員に歌って貰えないのが残念です。高校生から60才以上の人まで、年令も職業も音楽経験もさまざまです。第九を初めて歌う人が80名、残りは何回も参加している人で、連続9回の人も10数名あります。それ等の人達が9月以来練習を重ねて参りました。しかし何分にもアマチュアの集まりですから、ご満足頂けない点も多いかと存じます。どうぞご寛容下さいまして、あわただしい年の瀬のひと時を、第九の調べと共にお越し下さい。

指 揮 靱 山 和 明

独 唱 ソプラノ 山 田 綾 子  
メソソプラノ 木 村 宏 子  
テノール 大 野 徹 也  
バリトン 福 島 明 也

合 唱 県民第九の会合唱団  
合唱指揮 林原隆治  
ピアノ 古閑恵美

管弦楽 熊本交響楽団



指 揮 靱 山 和 明 (もみやま かずあき)

1968年桐朋学園高校音楽科入学。ヴァイオリンを宗倫安氏、指揮を高藤秀雄氏に師事。同年、第22回毎日学生音楽コンクール、ヴァイオリン部門にて第2位受賞。1971年桐朋学園大学音楽学部弦楽科及び指揮副科入学。1974年同学園指揮オーディションで第1位受賞。桐朋学園オーケストラ定期演奏会を指揮。1975年同学園卒業と共に新日本フィルハーモニー交響楽団に指揮者として入団。小沢征爾氏の副指揮者として活躍。また、朝比奈隆氏、秋山和慶氏の下、副指揮者として活動すると共に、新日本フィル、群馬交響楽団、その他オーケストラとの演奏活動、「オーケストラがやってきた」など多くのTV出演がある。1976年チェコ・フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者ズデニェク・コシュラー氏の招きにより、チェコ・フィル、そしてスロヴァキア歌劇場と、氏の下で研鑽を積んだ後、イタリア、シエナのキジアーナ音楽院においてF・フェラーラ氏によるセミナーに参加し、特別賞受賞と共に、記念演奏会にてブラハ・コンセルヴァトワール・オーケストラを指揮。1978年3月よりロンドンに渡り、BBC交響楽団の常任指揮者ゲンナジ・ロジエストヴェンスキー氏の下、研鑽を積む。その間P・プーレース氏にも師事し研鑽に励み、BBC交響楽団のゲストとして楽団内に滞在する。1980年豊島区立豊島管弦楽団常任指揮者就任。1981年新日本フィルハーモニー交響楽団の専属指揮者となる。10月には文化庁海外派遣指揮者としてロンドンBBC交響楽団に派遣される。1983年宮城フィルハーモニー管弦楽団(現・仙台フィル)常任指揮者に就任。1989年仙台フィル客演指揮者となる。また、1985年以来、毎年数回定期的にソウルの音楽会に招かれ、ソウル市立フィルハーモニー管弦楽団、コリアン交響楽団及びソウルアカデミー管弦楽団の常連指揮者として活躍しているほか、桐朋学園オーケストラの指揮者として、母校での指導にもあたっている。



平成元年12月24日(県民第九の会演奏会(指揮=小松一彦))から

山田 綾子(やまだ・あやこ)  
ソプラノ



国立音楽大学卒業。同大学院修了。二期会オペラスタジオ第29期生修了。最優秀賞・川崎静子賞受賞。オペラ研修所第6期生修了。平野忠彦、小松道子の両氏に師事。1985年、文化庁芸術家国内研修員。同年、第1回日本モーツァルトコンクール第3位、前田銅賞受賞。第52回読売新人演奏会出演。84年には第1回リサイタルを開き、日本歌曲、宗教音楽に力を注ぎ、各地で、リサイタル、コンサート活動をしている。

主なオペラは、「魔笛」の「夜の女王」、「フィガロの結婚」の伯爵夫人、「愛の妙薬」のアディーナ、「ロングクリスマスディナー」のルシア、「コシ・ファン・トゥッテ」のデスピーナ、「ドン・ジョヴァンニ」のツェルリーナ、「アルバート・ヘリング」のワーズワース、「ヘンデルとグレーテル」の「眠りの精」、「カルメン」のミカエラ、「魔弾の射手」の「花嫁に付き添う乙女達」等に出演し、歌唱の確かさには定評がある。

その他、フォーレ「レクイエム」、ルッター「レクイエム」、カール・オルフ「カルミナ・ブラーナ」、バッハ「クリスマス・オラトリオ」などのコンサートでもソリストとして高い評価を得ている。

NHKの「魔弾の射手」(ハイライト)のエンヒェン役を録音するなど放送関係でも活躍している。

1990年、サントリーホール定期演奏会・N響モーツァルトシリーズでは「レチタターヴォとアリア「テレッサーリアの民よ」「不滅の神々、私は求めぬ」K・316)を歌い、高度な歌唱技巧と声の魅力で好評を博した。

二期会会員

木村宏子(きむら・ひろこ)  
メゾ・ソプラノ



東京芸術大学卒業。関 種子、佐々木成子に師事。1957年文化放送音楽賞受賞。

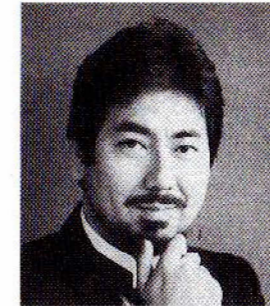
1959年「フィガロの結婚」のケルビーノでオペラにデビュー。美しい声と広い声域、豊かな音楽性と表現力を持ち、その後「椿姫」のフローラ、「ロング・クリスマス・ディナー」(ヒンデミット)のジュネビエーブ、「ラインの黄金」のフロースヒルデ及びウォークリンデ、「蝶々夫人」のスズキ、「こうもり」のオルロフスキー、「ナクソス島のアリアドネ」(R. シュトラウス)の作曲家、「ファウスト」のジーベル、などを歌っている。

他方コンサートの分野でも我が国第一級のメゾ・ソプラノ歌手として高い評価を得ており、1959年から5年間N響のベートーヴェンの「交響曲第9番」のソリストとして連続して出演したのをはじめ、主要交響楽団との協演により、「レクイエム」(モーツァルト・ヴェルディ)、「メサイア」(ヘンデル)、「クリスマス・オラトリオ」(バッハ)、「変ホ長調ミサ」(シューベルト)他、多くの曲を演奏しており、この分野においても不可欠の存在となっている。

また、'74年の「毎日ソリスト」で'78年6月に行なったりリサイタルでは、ドイツ歌曲の神髄に迫り絶賛をあげている。1982年には「デイドとエネアス」の名演唱によってウィンナ・ワールド・オペラ賞を受賞。昭和60年度 芸術祭賞受賞

二期会会員

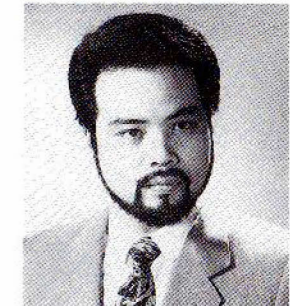
大野 徹也(おおの・てつや)  
テノール



東京芸術大学大学院修了。渡辺高之助、故三村祥子に師事。1977年、研究生時代に「魔笛」の武士に抜擢され、オペラデビューを飾る。1981年の民音コンクールにおいて第2位入賞し、同年秋「カーチャ・カバノヴァ」のボリスの成功で一躍名声を勝ち得た。1983年には、日本初演「ニーベルングの指輪」「ジークフリート」のタイトル・ロールを歌い大成功をおさめる。1982、84年「椿姫」アルフレード、1985年「魔笛」タミーノに出演。1986年秋には「ワルキューレ」のジークムント、また演奏会形式でも「神々の黄昏」のジークフリートを歌い、数少ないワーグナーを歌える歌手としての印象を強く与えた。また、1988年10月二期会公演「カルメン」ではドン・ホセで出演。一方コンサート活動も好評で、ヴェルディの「レクイエム」や「グレの歌」のヴァルデマール、ベートーヴェン「第九」等に出演している。

二期会会員

福島 明也(ふくしま・あきや)  
バリトン



東京芸術大学卒業。同大学院修了。1985年、第54回日本音楽コンクール第1位入賞(福沢賞受賞)第30回海外派遣コンクール特別表彰受賞。1986年、オペラ研修所第5期生修了。1989年、第17回シロ・オペラ賞新人賞受賞。森山俊雄、須賀靖和の各氏に師事。

オペラデビューは「ボエーム」のマルチェロ。オペラ研修所では「ドン・ジョヴァンニ」のタイトル・ロール、「祝い歌が流れる夜に」の金沢公一郎などを演じた。1986年、二期会「フィガロの結婚」のアルマヴィーヴァ伯爵で本格的にデビュー。1989年には、二期会「運命の力」のフラ・メリトネ、モーツァルト劇場「ハムレット」のタイトル・ロールを演じて、共に大きな成果を挙げた。今年も二期会創立40周年記念「お蝶夫人」に、11月には「フィガロの結婚」のアルマヴィーヴァ伯爵に出演。

また、バッハ「短調ミサ」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト、ヴェルディ、フォーレの「レクイエム」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」、オルフ「カルミナ・ブラーナ」などのソリストとして、コンサートでも活躍している。

今年も二期会創立40周年記念「お蝶夫人」に、11月には「フィガロの結婚」のアルマヴィーヴァ伯爵に出演。

二期会会員

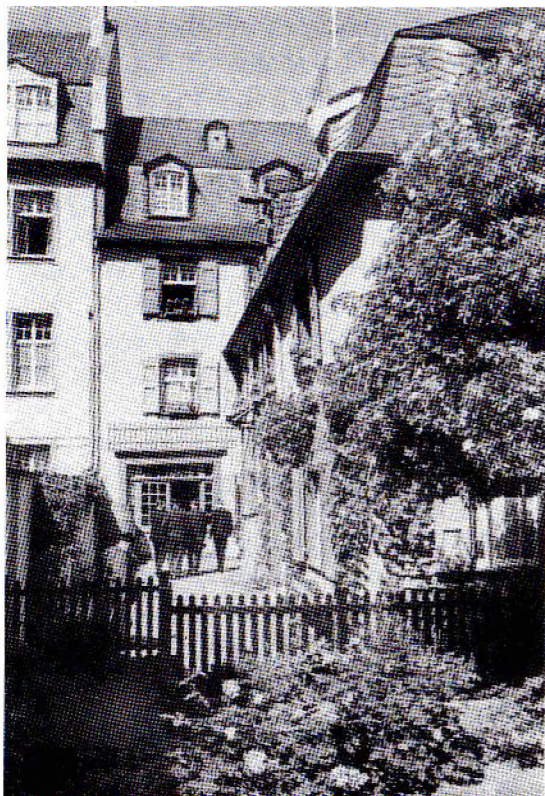
1. 「ロザムンデ」序曲 作品26 D797

シューベルト

2. 交響曲第9番二短調「合唱付き」作品125

ベートーヴェン

- 第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco  
maestoso
- 第2楽章 Molto vivace
- 第3楽章 Adagio molto e cantabile
- 第4楽章 Finale

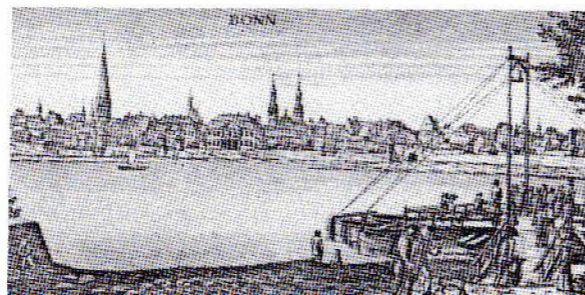


ベートーヴェンの生家（ボン）

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子を思い浮かべると、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手に取るようにわかる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

■シラー＝《歡喜に寄す》

対訳＝大宮真琴

O Freunde, nicht diese Töne! sondern  
lasst uns angenehmere anstimmen, und  
freudenvollere.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、  
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを  
ともに歌おう！

Freude, schöner Götterfunken,  
Tochter aus Elysium.  
Wir betreten feuer-trunken,  
Himmlische, dein Heiligtum!  
Deine Zauber binden wieder,  
Was die Mode streng geteilt;  
Alle Menschen werden Brüder,  
Wo dein sanfter Flügel weilt,

バリトン独唱・合唱

- ①歓びよ、神々のうるわしい輝きよ！  
楽園の娘らよ！  
われらみな、感動に酔い、  
天の高みの神殿に踏み入ろう！
- ②この世に厳しく引き離された者らを、  
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。  
御身の優しい翼の憩うところ、  
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

Wem der grosse Wurf gelungen,  
Eines Freundes Freund zu sein,  
Wer ein holdes Weib errungen,  
Mische seinen Jubel ein!  
Ja, Wer auch nur eine Seele  
Sein nennt auf dem Erdenrund!  
Und wer's nie gekonnt, der stehle  
Weinend sich aus diesem Bund!

四重唱・合唱

- ③大いなる天の賜物をうけた者らよ、  
真空の友情を勝ち得た者らよ、  
女の優しい愛を得た者らよ、  
歓びの歌を、ともに歌え！
- ④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも  
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！  
だが、それさえ持つことのできなかつた者は、  
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

Freude trinken alle Wesen  
An den Brüsten der Natur;  
Alle Guten, alle Bösen  
Folgen ihrer Rosenspur.  
Küsse gab sie uns und Reben,  
Einen Freund, geprüft im Tod;  
Wollust ward dem Wurm gegeben,  
Und der Cherub steht vor Gott.

四重唱・合唱

- ⑤すべてこの世に在るものら、  
自然の胸から歓びを飲み、  
すべての善人も、すべての悪人も、  
歓びの薔薇の小径を行く。
- ⑥歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、  
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、  
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、  
天使ケルピムは、神の御前に立つ。

Froh, wie seine Sonnen fliegen  
Durch des Himmels prächt'gen Plan,  
Laufet, Brüder, eure Bahn,  
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

テノール独唱・男声合唱

- ⑦歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、  
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
- ⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、  
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

Seid umschlungen Millionen!  
Diesen Kuss der ganzen Welt!  
Brüder über'm Sternenzelt  
Muss ein lieber Vater wohnen.  
Ihr stürzt nieder, Millionen?  
Ahnest du den Schöpfer, Welt?  
Such'ihn über'm Sternenzelt!  
Über Sternen muss er wohnen.

合唱

- ⑨たがいに手を取り合おう、億万の人々よ！  
この口づけを、全世界にあたえよう！  
同朋（はらから）よ、星のかなたには、  
愛する一人の御父が住み給うのだ。
- ⑩ひれ伏して祈るか？ 億万の人々よ。  
創り主を心に感ずるか？ 世界の民よ。  
星空のかなたに、主をさがし求めよう！  
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

## 1. 「ロザムデ」序曲作品26D797 シューベルト

シューベルトは劇音楽の世界に大きな関心を持っており、5曲の歌劇や戯曲のための音楽など、未完成のものも含めると全部で18種もの作品を書いている。しかし、その上演は殆んど顧みられることなく二、三の作品がかろうじて上演されたが、何れも不評に終わっている。

「ロザムデ」の音楽は1823年9月に作曲された。これはヘルミーネ・ヒェツィという女流作家の書いた4幕物の戯曲「キプロスの女王ロザムデ」の付帯音楽として書かれたもので、同年12月ウィーンで初演された。これは、戯曲が駄作であったために不評を受け、今日では忘れ去られたが、音楽だけは当時大変評判となり、ことに初演終了の時、作曲者が特に舞台上に呼び出される程であった。

シューベルトは「ロザムデ」のために10曲の音楽を書いたが、序曲を新たに作曲する時間がなかったため、前年に作曲してまだ上演されていないオペラ「アルフォンソとエストレラ」の序曲を「ロザムデ」初演の際、流用したのであるが、1825年に、シューベルトは、すでに1819年に作曲した「魔法のたてごと」のための序曲を「ロザムデ」の序曲として出版したのである。従って、今日「ロザムデ序曲」として演奏されている曲は、実際は「ロザムデ」の劇とは直接はかかわりのない「魔法のたてごと」の序曲として作曲されたものであるということになる。

曲はアンダンテの導入部が始まり、オーボエとクラリネットが導入部の主題旋律を奏すると、これが他の楽器によって対位的にうけつがれる。主部は、アレグロ・ヴィヴァーチェで、第1主題は、軽快に第1ヴァイオリンによって奏される。優しい第2主題は、木管楽器によって歌われ、中間部は、この二つの主題によって展開されていく。一つのクライマックスを築いたあと、再び第1主題のモチーフが断片的に奏され、再現部へと入っていく。



シューベルトの肖像画

## 2. 交響曲第9番 二短調「合唱付き」作品125 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ポンのフィッシュェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルントナート劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起きた。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

〔第一楽章〕 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びを勝ち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

〔第二楽章〕 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果すことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々が入り、そこで陶醉や麻酔へと駆りたてられるからである……」と言っている。

〔第三楽章〕 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するよ

うな明るく美しい第二主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせて行くことが、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」といている。

〔第四楽章〕 Finale

第1呈示部＝まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返ししながら全合奏に至る。

第2呈示部＝この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部＝やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ＝曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

### 「県民第九の会」実行委員会

(50音順)

有馬 俊一 (実行委員長)	草刈 秀克	黒葛原 潔	本山 洋
江橋 克己	下田 宰城	林原 隆治	山崎 崇伸
神田 一伸	田北 洋康	藤枝 昭俊	



熊本交響楽団  
KUMAMOTO SYMPHONY  
ORCHESTRA

〈コンサートマスター〉  
山崎 崇伸

〈1stヴァイオリン〉

東 恭子  
猪本 耀子  
井上 あかね  
紙本 剛  
坂田 弘子  
鈴木 洋子  
田野 育美  
龍野 珠美  
黒葛原 契子  
鶴 和美  
長坂 浩子  
平井 隆博  
山崎 崇伸  
柚原 三弥子  
吉永 誠吾  
吉永 裕子

〈2ndヴァイオリン〉

石原 圭子  
上田 萬二  
上野 暢子  
大江 紀子  
岡 純子  
清永 健介  
草野 正夫  
古閑 文子  
小柳 敦子  
佐藤 弘美  
田中 裕子  
田上 るみ子  
中村 郁子  
幟川 明子

東 真知子  
広瀬 晶  
松岡 千平

〈ヴィオラ〉

荒木 拓実  
荒木 智子  
芦田 由可里  
上田 恭子  
緒方 肇  
清元 晃  
甲田 啓子  
土野 優  
杉原 由江  
徳永 義治  
野尻 晃一  
開田 恭代  
毎床 寿一  
松野 多恵  
水田 剛  
宮下 孝之  
吉田 教子  
吉田 美智子

〈チェロ〉

石垣 博志  
片山 玲子  
高木 成子  
高浜 秀光  
槌田 博文  
長尾 和治  
長坂 輝喜  
原岡 喜重  
広瀬 瑞穂  
深松 真也  
福永 憲包

本田 義信  
三浦 純子

〈コントラバス〉

北村 博之  
國米 稔  
古泉 俊彦  
重田 まゆみ  
田上 博子  
歳田 和彦  
中村 哲  
平川 和秀

〈フルート〉  
〈ピッコロ〉

浦田 昌美  
緒方 宏明  
後藤 美奈子  
中原 孝文  
山口 邦子

〈オーボエ〉

片岡 久哉  
辰野 裕昭  
林原 志織  
宮原 道生  
宮本 千草

〈クラリネット〉

黒木 健次  
中村 波津子  
前野 美千代  
保田 明子

〈ファゴット〉  
〈コントラファゴット〉

黒田 孔太郎  
小林 太郎  
高木 群之  
蓮沼 昇

〈ホルン〉

上野 竜志  
梅古川 みき  
澤邑 義隆  
田畑 博行  
原田 光  
安松 真司  
山口 亮二  
山本 和夫

〈トランペット〉

市原 彰  
是松 和憲  
中野 真一郎  
堀江 幸司

〈トロンボーン〉

書川 欣也  
小多 崇  
田北 洋康  
古沢 浩幸

〈打楽器〉

川畑 知子  
白尾 友宏  
田中 里佳  
福島 好

県民第九の会演奏会記録

※は同時演奏曲

第1回 昭和57年12月28日(火)

指揮 山田 一雄  
独唱 新 圭子 木村 宏子 伊津野 修 高橋 修一  
※越天楽(雅楽)……………近衛 秀磨(編曲)

第2回 昭和58年12月11日(日)

指揮 大友 直人  
独唱 高見久美子 岡 ますみ 大野 光彦 柴田 啓介  
※歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲…………ワーグナー

第3回 昭和59年12月27日(木)

指揮 山岡 重信  
独唱 中沢 桂 木村 宏子 板橋 勝 池田 直樹  
※弦楽のためのアダージョ 作品11……………パーバー

第4回 昭和60年12月25日(水)

指揮 フランティシエック・ワイナール  
独唱 三縄みどり 妻鳥 純子 伊達 英二 中村 邦男  
※レオノーレ序曲第3番 作品72……………ベートーヴェン

第5回 昭和61年12月27日(火)

指揮 荒谷 俊治  
独唱 津下美奈子 木村 宏子 鈴木 寛一 芳野 靖夫  
※トッカータとフーガ 二短調……………バッハ〜ストコフスキー

第6回 昭和62年12月26日(土)

指揮 安永武一郎  
独唱 中沢 桂 木村 宏子 近藤 伸政 栗林 義信  
※エグモント序曲 作品84……………ベートーヴェン

第7回 昭和63年12月25日(日)

指揮 安永武一郎  
独唱 三縄みどり 木村 宏子 鈴木 寛一 平野 忠彦  
※序曲「コリオラン」ハ短調 作品62……………ベートーヴェン

第8回 平成元年12月24日(日)

指揮 小松 一彦  
独唱 秋山恵美子 木村 宏子 成田 勝美 高橋 啓三  
※序曲「プロメテウスの創造物」序曲 作品43……………ベートーヴェン

第9回 平成2年12月23日(日)

指揮 初山 和明  
独唱 山田 綾子 木村 宏子 大野 徹也 福島 明也  
※「ロザムンデ」序曲 作品26 D797……………シューベルト



# ベートーヴェン

# 第九



## 曲目

シューベルト  
ロザムンデ序曲 作品D797  
ベートーヴェン  
交響曲第九番ニ短調作品125  
合唱付き

指揮 羽山 和明  
ツボラノ 山田 綾子  
ダブルツボラノ 木村 宏子  
テノール 大野 徹也  
バリトン 福島 明也  
合唱: 県民第九の会合唱団  
管弦楽: 熊本交響楽団

**12/23(日)午後6時30分開演**  
**熊本県立劇場コンサートホール**

■主催 / 熊本県・財熊本県立劇場・県民第九の会・熊本県文化協会

■入場料 / S(指定席)3,000円・A(指定席1・2階)2,500円・B(自由席3階)2,000円

■入場券は、11月23日より県立劇場および市内各プレイガイドにて発売します。(KNサービス・熊本交通センター・大谷楽器・西野楽器・熊本県立劇場)

■お問い合わせ先 / 熊本県立劇場企画事業課 ☎096(363)2233・県民第九の会事務局 ☎096(344)2941

\*お子様でも一人一枚の入場券が必要です。なお未就学児童の方の同伴・入場はお断り致します。

\*会場内での喫煙・飲食・録音・録画等は禁(お断り致します)。

\*経演後、臨時路線バス(交通センター行・熊本駅行)を運行いたしますのでご利用下さい。